〝生き切る〟ことをコーディネート

その人と向き合い、最適解をとことん探し求める

株式会社 ぐるんとびー 看護統括
小規模多機能型居宅介護 ぐるんとびー
ケアマネジャー
石川 和子さん

取材・構成 医療福祉ライター 今村 美都

2015年7月、神奈川県藤沢市大庭地区にあるUR団地の一角を拠点に始まった小規模多機能型居宅介護ぐるんとびー。開設間もないぐるんとびーに、飛んで火に入る夏の虫…とばかりにやってきたのが石川和子さん。ケアマネジャーとして、看護師として、健やかなる時も、はたまた苦しい時も、ぐるんとびーと伴走してきた石川さんに取材しました。

見学に行っただけなのに、即採用?!

石川さんは、2人目の子、長男を産んだ直後「よく寝てくれる子だったので、勉強して資格でも取るか」と、ケアマネの資格を取得しました。「せっかくなので〝在宅〟をやってみようと考え、まずは〝藤沢中の事業所を見てまわろう!〟と訪ねた1軒目が、ぐるんとびーでした」

履歴書も持たずに、ふらりと見学に来ただけの石川さんに「よかったら、うちで働きます?」と、代表の菅原健介さんが声をかけました。「子連れでもよければ」とその場で入職が決定。菅原さんは「石川さんは、事故に遭ったようなもの」と笑いますが、マニュアルのないぐるんとびーならではの、身軽さが窺えるエピソードです。

住民として暮らすように看護し、暮らしの中で看護する

小規模多機能型居宅介護(小多機)に続き、2017年11月には訪問看護ステーション、2019年11月には居宅介護支援事業所、2020年4月には看護小規模多機能型居宅介護(看多機)と、利用者さんの、地域のニーズに応えるうちに、ぐるんとびーの事業はどんどん広がっていきました。今ではスタッフも看護、介護、リハビリテーション、事務、常勤非常勤含めて総勢70

ぐるんとびーの母親的存在・石川和子さん

名以上の大所帯。主に小多機に所属しながらも、ぐるんとびー全体を見守る立場の石川さんは、縁の下の力持ちとして、手腕を発揮しています。

「専門性の前に、人と人として向き合い、関係性をつくり、その上で専門性を発揮することを大切にしています。地域にいた人がたまたま看護師で、ぐるんとびーで看護師として人を支える。一方で、看護師も一地域住民として、ときに支えられる存在であっていい。暮らすように看護し、自分の暮らしの中で看護する」

目の前にいる利用者さんにとっての最適解を模索する

ぐるんとびーでは、今年の3月から4月にかけて看護職をはじめ、新たなスタッフがさらに増えました。そのころ、小多機の事業所と同じ団地に住んでいて、開設初期からの利用者である夫妻の、妻の節子さん（仮名）に精神的揺れが見られるようになりました。元々の精神疾患に加え、認知機能の低下が進行する節子さん。物盗られ妄想や、夫・スタッフへの暴言など、精神的不安が攻撃性に繋がりやすいところがあります。

そんな節子さんについて、石川さんは「スタッフの増減、ご主人の身体的変化や反応の遅さ、ご自身の認知機能の低下、この3つが精神的揺れの主な要因です。スタッフの増減があると、普段どおりのように見えても、大体1か月くらいで不安が強くなってきます。

UR団地の一角にある、ぐるんとびーの小規模多機能型居宅介護

そして、その矛先はスタッフやご主人への暴力・暴言として向かうことが多い」と、捉えています。

節子さんが放つ鋭い言葉の棘は、時にスタッフの心を突き刺します。「必要であれば棘を抜くサポートをしますが、そのスタッフが自分自身と向き合えるよう、敢えてそのままにしておくこともあります（笑）」と石川さん。荒療治にも思える彼女のスタイルの根底には、自分自身と深く対話をすることなしに、目の前の人と向き合えない、つまりは、その瞬間での最適なケアは実現できない、という思いがあります。

石川さん自身、ぐるんとびーでのさまざまな経験を通じて、自分ととことん対話をし、向き合ってきました。ぐるんとびーのモットーである「Always Why?」で、最適解を探し求める」を実践する中で、石川さんが身につけたスタイルなのでしょう。

福祉用具も、その人にとって適切に機能する環境を整える

節子さんのもう一つの精神不安定要素である、夫の幸生さん（仮名）の身体機能低下も日増しに進んでいます。娘さんたちとの話し合いでも幾度となく夫婦別に暮らす案が浮上していますが、答えは夫婦ともに「やっぱり一緒にいたい」。そこで、福祉用具による在宅のサポートを検討することにしました。

単に必要な福祉用具を入れればよいという発想で終わらないのが、プロフェッショナルの石川さん。

「家の中に見慣れない物が増えるだけで、ストレスを感じてしまうのが節子さん。福祉用具を入れるにしても、いかに物を増やさないか、家にあるもので代用はできないか、節子さんの負担にならないように工夫する必要があります。さらに、一度に全部を入れてしまうと、それも負荷になるので、段階を踏みながら、幸生さんの福祉用具として適切に機能する環境を徐々に整えていきます」

介護ベッドも、不自然な場所であることは百も承知で、まずは手前の部屋に置き、節子さんの反応を見て、少しずつ動かし、部屋に馴染ませていきました。手間ひまはかかっても、結果的には、節子さんや幸生さんだけでなく、節子さんを取り巻く人たちも含めた穏やかな日々に貢献します。

さまざまな人と暮らしを支えるコーディネーターとして

利用者さんの生活を支えるケアのプロとして、健康状態のチェックから医療的処置、薬の管理、身体介護、福祉用具に至るまで、看護師には幅広いコーディネート力が求められます。とりわけ、通い、訪問、泊まりというさまざまなサービスを組み合わせて在宅を支える小多機や看多機では、より一層のコーディネート力が必要です。

「在宅では、その人の生活を構成するさまざまな要素、家族はもちろん、病院、行政、地域コミュニティなどとの連携が不可欠です。それぞれの立場からいろいろな思いがある中で、利用者さんが生き切ることに焦点を当てて、コーディネートする力が求められます。〝これは私の領域ではありません〟と言うことも時には必要ですが〝何ができるかわからないけど、まず話を聞いて一緒に考えよう〟という姿勢が大切だと感じています」

通いのご利用者さんたちと草餅づくり

行動して起きたことが失敗ではなく、何もやらないことが失敗

ぐるんとびーでは、今年1月から、訪問看護ステーション所属の看護師も、小多機か看多機のいずれかのチームとして活動できるように、新体制を始動しました。利用者さんを医療という「点」ではなく、生活という「面」で支えられる看護師の育成には、小多機や看多機での経験が役に立つと考えているからです。とりわけ、ぐるんとびーの母体とも言える小多機は、学び舎として位置づけています。

入職後の研修期間には、他の事業所の配属でも、まずは小多機を経験するのが基本です。すぐに所属する事業所の業務に入らなければならないスタッフは、昼食の時間だけでも小多機の空気感を味わってもらうようにしています。看護師であっても、医療的ケアを提供するという専門性のみに固執せず、介護職と一緒に調理をしたり、利用者さんと一緒に過ごしたり、生活を共にするのがぐるんとびー流。

「医療というものさしではなく、暮らしの中にはやってみないとわからないこともたくさんある。だから、テヘペロ（うっかりミスや失敗などの際に、テヘッと笑ってペロッと舌を出す）を覚えたらいい（笑）。それがトライ&エラー。何か行動して何か起きたことが失敗ではなく、何もやらないことが失敗。最後の責任は私が持つから、やってみて、と」

カラッと笑いながら話す石川さんの言葉は、軽やかに聞こえます。しかしながら、マニュアルがない中で自分で考え、決断し、行動するということが、言葉で言うほど簡単でないことを誰よりもよく知るからこその、重みがあります。

好きに生きて、好きに死んだらいい

全体を俯瞰する立場の石川さんですが、必要とあれば、現場もバリバリこなしています。つい最近も、看取りの対応をすることになり、未就学児の息子を小多機と同じ団地に住むスタッフ家族に急遽預け、その間にエンゼルケアを行ったと言います（ちなみに、息子くんは、スタッフのお子さんたちとご機嫌に遊んで過ごしていたとか。これもまたぐるんとびーならではの一場面）。

生き切ることをサポートした実感があるからこそ、最後の場面にも笑いがありました。「生きている時も、死ぬ時も、好きにしたらいいと思うから、笑いもある。好きに生きて、好きに死んだらいい。誰の正しさではなく、その人の人生だから」

ぶっきらぼうにも聞こえる言葉の奥に、目の前の人に、自分に、とことん向き合ってきた、ひとりの看護師の矜持が垣間見えます。

UR団地に住むご近所さんでご利用者さんと一緒に